

第六章
豊年舞踊詞



第六章
豊年舞踊詞

(十五夜踊詞)
コトバ

与論島の豊年踊（一名十五夜踊）は、県の無形文化財に指定されている。永禄四年（一五六一）に創作され、それ以後踊りつがれてきた。この舞踊詞は一番組と二番組とから構成され、一番組の踊り言葉は室町時代の狂言等から取材し、その踊り方は本土風のものとなっている。二番組の踊り言葉は与論島はじめ奄美諸島や沖縄のものから取材し、その踊り方は沖縄風の舞踊を取り入れている。舞踊創始の目的は、与論島が永久に五穀豊穰にして平和であることを祈願するとともに、島民の娯楽となつて精神的結合をはかることであつた。この舞踊は日琉芸能史上貴重なものであるとともに、舞踊言葉は、古代語・平安朝語・鎌倉時代語・室町時代語のものが含まられて

いて、国語学的にみても研究されるべき重要なものである。現在、日本音楽界や芸能家の間でも研究されつつある。

一 豊年踊の起源と盛衰

毎年旧暦の八月十五日に、常主神社トコヌシの祭典を終えた後

境内で行われる奉納踊（別名豊年踊）は、その起源について説が分かれている。以前には、ユガプウ踊・里主サトウヌシ

踊・シニグ踊とも言われていた。ユガプウ踊（世が豊年であるための舞踊）がいつの頃から始められたものであるかについては、ある人は薩藩治下の時代に入る前の慶長の初め頃だといひ、ある説では元禄の時代であるといひ、林富光の説では永禄四年に起こったと言っている。

それらの中で最も信ずべき説としては、安政六年に富光が筆記した原稿を活字印刷した龍野輿澄編著「城籠踊・舞踊集」に記された永禄四年とみるのがよいだろう。永禄四年は正親町天皇の御代で、昭和五十七年から四百二十年前に当たる。川中島の戦が始まった年であり、薩藩治下時代に入る四十八年前の琉球服属時代の末期の頃で

ある。

舞踊の名称について前記の龍野本には、「城籠踊」とされて城籠の文字を当ててあるが、これは正しいものとはみられない。グシクが江戸城や大坂城などの本土の「城」と類似した形態をもち、そこで踊られるからかく当てられたものであるかもしれぬが、グシク（グスク）と城とは語源や起源及び意味概念を異にするものであるから、城籠の文字を当てるべきではない。常主神社の祭神に対する奉納と豊年祈願が直接の起こりで、最初世主がみずから舞いそれが世襲となり、後には里主踊とも呼ばれるようになったのである。龍野本には由来について、次のごとく記されてある。

而して愈々島民の統治を為すに当り祭政一致民富、安穩を祈念し、城内西側に築城間もなく病死した大里技師の霊を護城の神として祭り、更に積墓の神々其の他の神々を此処に合祀して、徳主神社と名付けて与論鎮守神となし、以て祭祀を行ふ事になった。従つて此の祭典に供する奉納踊並びに島民の統一融和たる娯楽横関の必要を痛感し、長子又吉里子を琉球並びに大島

四島に遣して二番組の舞踊を集蒐せしめ、或は二男殿内与論主を内地に派遣して一番組の舞踊歌集を調査せしめ、又は三男屋口首里主には島内の娯楽を集めさせて之を組立て、更に長さ三丈幅四尺に達する嶋中安穩と書したる大旗を造り、此の旗の中心兩側に昇天飛龍の像を描き、上方に太陽を朱描し、最上方に稻穂の形状したる竹輪の枝に団子を付け、以て旭日昇天五穀豊穰の祝意を表し、其の旗下に島民を集合せしめて、徳主神社の祭典に因み、豊年祈願祭の奉納踊並びに娯楽を為さしめたので島内が安泰に治まる。此の年が即ち永禄四年で、以後毎年之を執行するを恒例となしたと伝ふ。此れが即ち城籠踊の由来である。

右の龍野本の説によると、グシク構築後病死した大里技師や他の昔からの神を合祀するため常主神社が創建され、その祭神への奉納踊として豊年舞踊を創作すべく、与論島主の又吉按司が、長子の又吉里子を沖繩や大島四島に派遣して資料を集めさせ、三男の屋口首里主には島内の娯楽を集めさせて二番組を組み立て、二男の殿内与論主を本土に派遣して一番組の資料を集めさせたという

ことになっている。これに対し他の説は、川内与論主には二人の弟があつて、末弟の殿内万寿は天才的な音楽及び舞踊の達人であつたが、長兄の川内与論主は琉球風の舞踊を取り入れることが好きであり、末弟の万寿はこれに飽き足らず、みずから日本本土に上国して大和風のものを取り入れるべく、本土の歌詞や舞踊を取材して帰島後一番組を組み立てたという。なお他の説によると、長兄の川内与論主が、琉球に朝貢しての帰途暴風に遭い、船はシャガの国（佐賀県か）に漂着し、一年間本土に滞在して取材し帰島後一番組の舞踊を創作したという。以上の三つの説があるが、龍野本説が最も信頼すべきもののようにみられる。

舞踊詞の構成は、一番組と二番組とから成り組踊りに仕込まれている。一番組の内容は本土のものから取材し室町時代の能や狂言等を参考にしている。二番組の舞踊詞は与論島内や奄美四島のものを集め、その舞いは手踊りと扇踊りになつて沖繩風のものを取り入れている。二番組の舞踊のとき歌われる歌曲はカギヤヤデイ風の節になつているが、これは後のプウラシヤ歌（祝歌）の前身

形をなすものである。この歌曲は、琉球の尚清王の死後に世継ぎの問題が起こり、それがようやく解決した際に新城親方安基が喜びのあまり即吟した歌だと伝えられている。その年は後奈良天皇の弘治二年（一五五六）であったという。（二番組の踊りは琉球で創始されたとの説あり）

舞踊は、氏子をはじめ町長外諸団体・一般町民による社前での豊年祈願の祭典を終えてから歌とともに奉納されるが、最初に舞われる「雨賜ボオリ」^{アメミタ}の際には、四尺四方の大旗を持つ旗主が笠のごとき帽子をかぶり、舞い手は成人男子の五人で構成され、頭にはそれぞれ赤・黄・青の長い錦織りの布を巻き、それを背中に長く垂れ下げ、太鼓打ち手は太鼓持ちの男の肩に載せられた太鼓を打つ。太鼓をかつぐ男は、頭に冠をかぶり神官のごとき服装をする。

大旗の中央部には「島中安穩」と筆太に書かれ、その文字の両側には空を飛んでいる龍を描き、上方には太陽の出るのを描いてある。その意味するところは、島内が安らかに治まり、その盛んなること^{アツカ}恰も籠が空中を翔

けるがごとく、旭日昇天の勢いで生生発展してゆくことを表したものである。旗竿の最上方に取り付けてある竹輪には、枝も折れんばかりの大きな稲穂をかたどったものを取り付ける。これはいうまでもなく穀物豊穰を意味するものである。稲穂の下部には雄しべと雌しべをかたどった棕櫚作りの物が付けられ、その片方には風車を取り付けてある。これは稲が風媒花であり、穂風そよそよ吹き干害や風害の自然の暴威を受けずに、みごとに交媒して十分実つてもらうようにとの祈願に発するものである。島の開発当初から島民が最も苦しめられてきたことは風害と干害であった。それを抜い除くため、まず奉納祈願として一番組と二番組の舞い手が合同で舞う。また旗入りの歌と称して大旗を持つ旗主が舞うための歌も歌われる。これは島民の最大要求の一つである雨乞いの祈願を歌ったものである。

二番組の舞踊に用いる旗竿は、古くは三尋^{ヒロ}以上の長さのものが用いられ、万一旗竿が風のため折れまたは倒れたりする場合には、旗主（旗差^{ハタサ}シといひ旗を振る人）は一昼夜の間に死亡し、また旗の倒れた方向には必ず災害

が起こると言い伝えられている。それで旗舞踊の終わるまでは、それこそ無我夢中に真剣に行われるのである。豊年踊の創始当時から用いられたと言われている太鼓と大旗は、今なお又シドウイ（踊り手の主家、座元）の宅に大切に保管されている。

豊年踊は、明治三年までは七月十七日のシニグ祭と八月十五日の年二回舞われていた。それで一名「シニグ踊り」とも言われていた。明治四年全島のウガン（フラット）拝み所の聖所）が、琴平神社に合祀され、シニグ祭は廃止されるようになったため、常主神社で豊年祈願の祭典を挙げた後、豊年踊として継続して舞踊されるようになり、

三月十五日・八月十五日・十月十五日の年三回舞われることになった。豊年踊がシニグ踊として行われていた時代には、グシク字の屋号ホオチのシニグ処において、一番組と二番組の全部を舞い終わり、次にウプミシサク（後のクチビヤアサクラ）において、サアクラ主の賄いを受けて舞われ、トウヌ地（殿地・代官所在地）において、二番組の全部を舞い納める慣例になっていた。もし何らかの都合でホオチサアクラにおいて、全部を舞

い終わることができない場合には、村の責任者たる与人に神のたたりが即時に現れたと伝えられている。明治以後豊年踊を舞い終わるか否かについては、村長の命に従うことになった。

明治十七年には、旱魃のため農作物枯死し経済不況を招き、豊年踊は中止されるに至った。十九年には全島に痘瘡蔓延し死者多数続出し、二十年には火災相次いで起こり（少ない場合五、六棟、多い時は二十数棟）、島民はついに窮乏と悲嘆の極に達した。二十二年グシク字の林佐江勝の米寿の祝いの席で、集まった村の有志のすべの口から、

近頃毎年災害が続いて起こるのは、昔から行われてきた豊年祈願の祭りと、豊年踊を怠ったから神のたたりにあつたのだ。一日も早くそれらを再興せねばならない

ということが述べられた。この発言はにわかには島内の世論となつてしまった。そこで豊年踊の師匠として林佐江勝の子富光を中心に、翌二十三年から、毎年八月十五日に行われる豊年踊（以後は十五夜踊とも言われるように

なった」と、隔年に行うシニグ祭が復活して行われるようになったのである。ところが、明治三十二年になってシニグと豊年踊の廃止論が再び燃え上がった。その時林清重氏が、十五日ユエー（寄り合い）と三十日ユエーの村民集会の席上で、盛んに継続論を吐いたためそれが認められ、以後現在まで継続されてきたのである。その時の廃止論と継続論をめぐる論議は数日間かつたという。

舞踊の踊り手や関係者は世襲になっていて、明治六年頃まで作見廻サクミモロの職にある者は、この舞踊を世襲する責任を負わされていた。以後も舞踊の関係者は世襲になつており、豚舎や牛馬舎から肥料を持ち出すことを禁じられ、物忌みや食忌みをして昔のままを踏襲してきた。作見廻は各字に一〜二人が置かれ計十一人いた。この十一人と「チク」と称する小使の役を務める者の計十二人で、二番組の踊り手を組織していた。昭和十年頃に二番組踊の又シドウイを務めていた家は、江戸時代にはウタナノ井戸から東に位置するインジヨオナ井戸あたりの、北方の地に住むことはできない慣例になっていたが、明治初

年頃トオマの与人が朝戸字の喜佐熊に又シドウイを命じてからは、いずれの地に住んでも差し支えなくなったのである。

二 舞踊詞章と内容

安政六年に富光が筆記しておいた舞踊詞の原稿は、その後土持喜美行が長い間所蔵していた。それを昭和十一年初めに龍野金澄が複写して、その年の夏に龍野輿澄編著として、神奈川県川崎市幸町三の八九五、輿文堂印刷社から活字体の『城籠踊・舞踊集』（非売品）として発行されている。この龍野本は三十ページの本文と、本文の前に「謹写之御挨拶（輿澄の謹述文）と目次があり、本文の後には「城籠踊の由来」文が添えられている。本文最終ページの後に、昭和十一年五月龍野輿澄校正印刷の添書が記されている。グシク構築や舞踊の由来については、田島・龍野氏の所蔵古書及び与論主伝録の由来記を基として記されたと述べてある。この龍野本は和綴青表紙になっている。

安政六年に富光が筆記した舞踊詞の原稿は、目次がな

く、「一、三者囃子」、「二、二十四孝」などのように内容項目に番号を付けてなかったようである。それを明治に入ってから富光の原稿を借りて書写した若干の流布原稿が現れた。富光原稿に内容項目の番号を付けてないため、書写の流布原稿は項目の順序を取り違えたり、鎌倉三代記の中に含めるべき内容を、源頼朝公・実平・鎌倉三代記のごとく分割して見出し項目を付けた流布稿が生ずるようになった。龍野本は、内容的にまとめ、流布稿を参照して項目に番号を付けたものであるから、定本としてよからうかと思われる。

富光によつて書かれた原文には、誤字や脱字が多く、句読点の位置も適当でなく、漢字の振り仮名にも誤った個所がかなりある。単語の語形がわからなかったものとみえ、語句不可解の個所も少なくない。龍野印刷文にはそれらを改めず原文のままを活字にしている。山田実は、龍野活字本と流布稿を厳密に比較参照し、次の要領で改訂することにした。

一、つとめて原文のままを尊重するが、誤字・脱字・

誤った振り仮名はこれを改める。

二、単語の語形の誤ったものは、語学的見地からこれを改める。

三、龍野本には、「大名」「小ちゃ」のごとく「」を挿入してあるが、本改訂文には「」を除く。

四、句読点を適当な位置に付け、適当な漢字をあて読みやすくする。

富光の筆記文は安政六年に書かれたものであるが、これは以前からあった記録を筆記したものであるかもしれない。しかし、多量の原文を長い間にわたり筆写しているうちに部分的な欠損が積み重なり、いくらか時代時代の言語に置き換えられた個所もあるだろう。一番組の舞踊詞には室町時代の本土語が多量に反映されているが、与論方言を混入した個所もかなり見られる。語学的に見ると、忠実な音韻表記や正しい文法的記述をしているとは言えないが、能の詞章の謡曲や狂言・古浄瑠璃から取材しているため、多量の古語が用いられている点など、国語学的・芸能史的にみて貴重な文献であることは言うまでもない。

能楽は、中古から室町時代へかけて行われていた滑稽

卑俗な演劇で、能の詞章は謡曲と呼ばれた。その内容は神仏に関するものや武士道的な義理人情を取り扱ったものが多く、封建時代の倫理を強く反映しており、その文章は、鎌倉時代の物語や歌謡などの文章詞章を綴り合わせたところの韻律をもったものである。狂言は能に付随して上演され、能が舞踏的なものを多く伝えているのに対し、猿楽本来の滑稽卑俗な問答、ものまねの様式を伝えて発達したもので、内容は下級武士と貴族とその家来あるいは庶民を登場させて、主人の無知無力に家来や庶民の怠惰・狡猾さを配して、明るいユーモアを漂わせていて、室町時代の口語が用いられている。古浄瑠璃は室町時代後期の語り物として発達したもので、浄瑠璃姫物語（一名十二段草子）が流行し、その節を浄瑠璃節と称したものに始まっている。最初のもは曲節も幼稚で単に扇拍子で語ったり、琵琶に合わせて語ったりしていたにすぎなかったが、近世になって三味線に合わせるようになった。

与論島の豊年舞踊詞一番組は、謡曲や狂言などから取材し古浄瑠璃等を参考にして組み立てたものである。

豊年踊一番組（大和踊言葉帳）

安政六年己未富光筆記。昭和十一年五月龍野金澄複写、

昭和四十六年九月山田実改訂、昭和五十七年五月山田実

再改訂。

一 三者囃子

大名 罷り出でたるは此のあたりに於いて隠りもなき

大名で御座る。今日は早晩の通り豊年諸願成就

として、例年の祭り事があると聞く。夫に付き、

すゑ広がりヒルと云ふ祝の物を持って行かにはならん

程に、よい大企てオオコトワテぢや。

小ぢや あい。

大名 今日キユはのふ。

小ぢや あい。

大名 今日キユはいつもの通り豊年諸願成就として、例年

の祭り事があると聞く。夫れに付き、すゑ広がりヒル

と云ふ祝の物を持って行かにはならん程に、はや

うく買って来やり。

小ぢや 畏カシクりました。 扱サて末広スエヒルがりと申すは如何様イカヨウなもので御座グザりましか。

大名 末広がりといふはのふ、斯コふ末ヒルが広がヒルつて、かなめしつかとして、みるふて見ればのんめのんめとして、はづいて見ればくんくとして、それはさつとかへたのふ事コトで、はやく買コトつて来やり。

小ぢや 畏カシクりました。 扱サて斯コふ末ヒルが広がヒルりまして、要カナメしつかとしまして、みるふて見ればのんめのんめとしまして、はづいて見ればくんくとして、さればさつとかへたのふ事コトで御座グザりまするか。

大名 それさへ、小ぢやモノオボエは物覚モノオボエがよい。 はやく買コトつて来やり。

小ぢや 畏カシクりました。 扱サて都ミヤクと申せば手広テヒロ所コロであり、先づ此のあたりからは斯カヤウ様に見るふ。

小ぢや 末ヒルひるがり買コトふ。

笠売 田舎人エナカヒトだそうな、末広がり得エしらず、末広がり買コト

をくといふ。 此イシユの古イシユのからかさイシユを以イテつて、一イチぬ一イチが一イチ、壹貫目イチとたまマキをかへて買マキつて参マキらそふ。

笠売 末広がり売コトるふ。

小ぢや 扱サて末広がり買コトひませふ。

笠売 扱サて末広がり売コトりませふ。

小ぢや 扱サて末広がりコトと申すは何コトの事コトで御座グザるか。

笠売 扱サて末広がりコトと申すは是コレが事コトで御座グザります。

小ぢや 末ヒルが広がヒルりだと申すはどの事コトで御座グザるか。

笠売 末ヒルが広がヒルりだと被オフセ仰オフセましか、是コレが事コトで御座グザります。

小ぢや 成程ナルホドひるがりましか。 かなめしつかとおちたのふ事コトと被オフセ仰オフセましか、どの事コトで御座グザるか。

笠売 かなめしつかとおちたのふ事コトと被オフセ仰オフセましか、此コレのかねの事コトで御座グザります。

小ぢや 成程金カネが御座グザります。 みるふて見ればぬめくと申すは、どの事コトで御座グザるか。

笠売 みるふて見ればぬめくと被オフセ仰オフセましか、是コレが事コトで御座グザります。 是コレは、なナあアにニがガもモんンの上ウハ手の砂テと草クサを以モちて、七日七重ナヌカナナヘさサみミがガきキ立タてテまマしたに依ヨりて、斯コふフみるルふて見ればのんめくと申マべます。

小ぢや 成程ぬるめさふに御座る。はづいて見ればこ
んくんと申すはどの事で御座るか。

笠売 はづいてみればこんくんと被仰まするは、こん
くん是れが事で御座りまする。

小ぢや 成程こんめきまします。さればさつとかへたの
ふ事と申すはどの事で御座るか。

笠売 さればさつとかへたのふ事と被仰まするは、こ
ぶしふくめまして取替トリカヘをしまして、此の柄を以ち
てふんくん是れが事で御座りまする。

小ぢや 成程たりそふに御座る。代金はいくら。

笠売 吉イチん吉イチが一、吉貫目で御座りまする。

小ぢや ちつと高値タカネには御座らんか。

笠売 掛値カケネなし掛値なし。

小ぢや しからば信じますふ。(龍野本には欠けている)代金進じますふ。

笠売 成程受け取りました。

小ぢや 来年も登つて買ひましふ。

笠売 来年も登らしやり、こら若しく。

小ぢや なんとなんと。

笠売 是れを買つて下クダらしやいてのふ、若旦那オンキの御機

嫌ゲンにはづりたる時、是れを直し置くはやし事があ
る。是れをひとはば教シへて進シンじませふ。

小ぢや 是れは一段カタシキ忝カのふ御座る。(この時小ぢや
から傘を笠売が取つて開く)

笠売 ふんくん此の金に留めましてのふ。

小ぢや あいあい。

笠売 笠をさそふなら、かしがやあんま人の笠をさそ
ふなら、我も笠をさそふことにもさればや、よか
にもそふよな。

笠売 これが事で御座りまする。

小ぢや これ一段カタシキ忝カのふ御座る。私ヒトハバ一幅はやのふて
見ましふ。

笠売 こら良ふ御座る。

小ぢや 此の金に留めましるか。

笠売 あい。

小ぢや 笠を差そふなら、かしがやあんま人の笠を差
そふなら、我も笠をさすやことにもされ、良ユかに
もそふよな。

小ぢや これが事で御座りまする。

笠売 それも小ぢやさへ物覚が良う御座る。

小ぢや くら一段忝カタジきのふ御座る。来年も登って買ひましふ。

笠売 来年も登らしやれ。

小ぢや 旦那様〜。

旦那（大名） なんと。

小ぢや 末ひるがり買って参りました。

旦那 どちら出せ。

小ぢや これが事で御座ります。

旦那 して末ひるがりと云ふが。

小ぢや 扱て末ひるがったと被仰オッせられましたは、是れが事で御座ります。かなめしつかとおちた柄エのことと被仰ましたは、是れが事で御座ります。

みるふて見れば、のんめのんめと被仰ましたは、

是コレが事で御座ります。是はなあにがもんの上ウハテ手

の砂と草を以ちて、七日七重さがき立てましたに就ツイて、斯コふみるふて見れば、のんめのんめと伸ヌべまします。はづいて見れば、こん〜と被仰まし

たは、こん〜是が事で御座ります。さればさつ

とかへたのふ事と被仰ましたは、こぶしふくめまして、此の柄をもつてふん〜是が事で御座りま

しる。

旦那 ひとつの身小ぢや、ひと切キリりて捨てても足らんやつ、おの身又も来たなら斬〜って捨てよふ。

小ぢや 口クチ惜チヲしゃ口クチ惜チヲしゃ、はるばるの都ミヤコに登りて

町人にだまされ、末スエヒル広がりを買損〜じて旦那の機嫌にはづれたり。されどされどは無念な事であり、

あはつと案じ立〜った事が有る。都ミヤコの人も心のや

さがたに有りて、若ムし旦那の御機嫌オンキゲンにはづれたる

時、是れを直し置き、はやし事をおしへて有り、

夫ソレをひと幅ハバはやして見ませふ。

小ぢや 笠を差すなら、かしがやあんま人の笠を差そ

ふなら、我も笠を差そふやことにもされや、良かにもそふよな。

旦那 あは如何イカにも太郎小ぢや、其の笠早く持つて我

が上に差して事にもさりや、良かにもそふよな。

長者大翁^{ウツ} 出ようちやる者^{ムヌ}や、わぬどう長者の大翁

やし^{カミムヌ}が、歳^{トツン}や八拾余^{ハチジユウ}りにむなりば、嚙物^{カミムヌ}しいや、

いや続^{チヂ}からぬあしせ、子^{クワ}ぬ等呼^{チャアユ}でい相談^{バナ}さん。

同人 親雲上呼^ユでい来^クふ。

親雲上 おを。

大翁 お前^{イヤア}が知^{トウ}つちゆる通^{トウ}り、歳^{トツン}や八拾余^{ハチジユウ}りにな

りば、嚙物^{カミムヌ}しいや、いや続^{チヂ}からぬあしせ、お前^{イヤア}子^{クワ}

ぬ坊^{ケル}さ殺^ヌち、坊^{チイ}さが飲^ヌみゆる乳^{チイ}、重^{チイ}りゆる乳^{チイ}、わ

ぬに呉^{ヒトツキ}りたま^{フタツキ}い。一^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む二^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む、生^{ヒトツキ}き増^{フタツキ}さら増^{フタツキ}さ

んてい思^{ウム}ゆん。

親雲上 大翁ぬいみせえしや、狂^フり言^{ケトウ}どう被^{イミセエ}仰^{イミセエ}る。

あたら玉^{タマク}黄^{カニ}金^{ガニ}坊^{ガニ}さとう、歳^{タマク}や八拾余^{カニ}りになゆる大

翁ぬいみせえしとう、代^{タマク}へや悪^{カニ}つさり。

大翁 いやあや判^{フカ}らじえいや、親^{ウヤ}ぬ孝^{シキ}仕^{シキ}切^{シキ}らぬあしせ、

戻^{ムド}り^{ムド}。

同人 筑^{チク}どん呼^{トク}でい来^クふ。

筑^{チク}登^{トク}之^{トク} おを。

大翁 いやあが知^{トウ}つちゆる通^{トウ}り、歳^{トツン}や八拾余^{ハチジユウ}りになり

ば、嚙^{カミ}み物^{カミ}しいや、いや続^{チヂ}からぬあしせ、いやあ

子^{クワ}ぬ坊^{ケル}さ殺^ヌち、坊^{チイ}さが飲^ヌみゆる乳^{チイ}、垂^{チイ}りゆる乳^{チイ}、

わぬに呉^{ヒトツキ}りたま^{フタツキ}い。一^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む二^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む、生^{ヒトツキ}き増^{フタツキ}さら増^{フタツキ}

さんてい思^{ウム}ゆん。

筑^{チク}登^{トク}之^{トク} 大翁ぬいみせえしや、狂^フり言^{ケトウ}どういみせえる。

あたら玉^{タマク}黄^{カニ}金^{ガニ}坊^{ガニ}さとう、歳^{タマク}や八拾余^{カニ}りになゆる大

翁ぬいみせえしとう、代^{タマク}へや悪^{カニ}つさり。

大翁 いやあや判^{フカ}らじえいや、親^{ウヤ}ぬ孝^{シキ}仕^{シキ}切^{シキ}らぬあしせ。

戻^{ムド}り^{ムド}。

同人 坊^{オキナ}さが翁^{オキナ}呼^クでい来^クふ。

坊^{オキナ}さ翁^{オキナ} おを。

大翁 いやあが知^{トウ}つちゆる通^{トウ}り、歳^{トツン}や八拾余^{ハチジユウ}りになり

ば、嚙^{カミ}み物^{カミ}しいや、いや続^{チヂ}からぬあしせ、いやあ

子^{クワ}ぬ坊^{ケル}さ殺^ヌち、坊^{チイ}さが飲^ヌみゆる乳^{チイ}、垂^{チイ}りゆる乳^{チイ}、

わぬに呉^{ヒトツキ}りたま^{フタツキ}い。一^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む二^{ヒトツキ}月^{フタツキ}む、生^{ヒトツキ}き増^{フタツキ}さら増^{フタツキ}

さんてい思^{ウム}ゆん。

坊^{オキナ}翁^{オキナ} おをを、行^{トク}きてい妻^{トク}とう相^キ談^キし来^キやびらん。

大翁 いん。

坊翁 みとがねよ、みとがねよ。

みとがね 何うがたり。

坊翁 大翁ぬいみせる事ぬや、歳や八拾余りになり

ば、うしやがる物しいや、いや続からぬあしせ、
いやあ子ぬ坊さ殺ち、坊さが飲みゆる乳、垂りゆる乳、わぬに呉りたまい。一月む二月む、生き増さら増さんていみせえる。

みとがね 舅親がなしぬ、いみせえる事ぬ成たり。

若さぬ身なりば、子や産替ていむ、抱かりやびゅっ
しゃみ。歳や八拾余りになゆる親がなしや、二度かへても拜まらぬあしせ、良かたり。

坊翁 いん、良かる妻やさ。

同人 大翁の前さあり。

大翁 何うが。

坊翁 行きてい妻とう、相談し来やびたん。

同人 若さぬ身なりば、子や産替ていむ、抱かりや
びゅっしゃみ。歳や八拾余りになゆる親がなしや、
二度かへても拜まらぬあしせ、良かんで言やびゅん。

大翁 いんにやていからわぬや、あんた其谷の三本小

松の下に待ちて居ら。坊さ、みとがね連りて来ふ。

坊翁 おをを。

同人 千里野の原に迷ひ出て見れば、大道方角定めなし。あんた草毛田の先の、三本小松の下に定めあり。其の松の印に定めある。

同人 大翁の前、さあり。

大翁 何ふが。

坊翁 坊さ、みとがね連りて来やびたん。

大翁 いんにやていから、此処からかん、二尋が
内穴掘てい、坊さ埋みゆる事せえ。

坊翁 おをを。朝夕伽しゆたる玉黄金坊さ、親孝行
の道にくまに送やびゆらん。

同人 舌鏃落せばまこひて、笑つて穴に向かふ。式

鏃落せばまこひて、笑つて母に向かふ。其り見て
涙のよせりまらん。

同人 御生ぬあるならば、又戻つてい抱かり来ふよ。

坊翁 あゝ我が子や宝とう生まりたる、なんぢやぬ手

箱バクぬ拜マまりゆん。黄金テイバクぬ手箱テぬ拜マまりゆん。是クり

大翁ウミぬ前に御目ウミかきてい、見らにはならぬ。

大翁 いん。其ウりやさく。昔ワラヒ我が幼少トウキぬ時、かじ

みてい置ウつちやる金ユツやさ。三人ミタリぬ子呼キムでい、肝見

い違チガいながら、宝讓ユツてい見キムやん。宝出ユツしやんせ。

先サキぬ二人フタリしやいやいや事、親サキぬ孝フタリしきらぬあしせ。

黄金サキぬ手箱フタリや坊フタリさに呉フタリりてい、なんぢやぬ手箱フタリや

みとがねに呉フタリりてい、でえでえ家戻ヤムドウてい祝ユハヒさ。

坊翁 おをく。

同人 うしくがじまるや、石抱クワウマカちどうばせる、子孫クワウマカ

抱クワウマカちばせる、長者クワウマカの大翁クワウマカ。(帰クワウマカる時この歌を歌う)

三 町奉行

大名 町方ヨサマ々の道理メゆたかに治メり、先メず目出度メふ御

座メる。爰コトに又コト吉屋コトといふけん組コトの者諸道コトにわたり、

武芸ムゲを争ムゲひことこふ、むつかしと聞コトく。是コトまた

埒ラチを明ラチかしてやらふ。

供トモ二人フタリはこ持トモ五郎フタリ さらんさ浜松トモの音フタリはあさんさ。

時の顔コト八コト いやさ、是コトに出過コトごしたは時の顔コト八コトと言コトふ

た若い者コト、わがしめりに、かつぷりさいく五徳ゴトク

ふつて、くりぞたつがへんじを仕形シカタに依コトつて、か

ぐらさまにきせりて、もういがき奥コトの間に座コトさま

の声コトがひびき渡る。是コト何事コトぢや、たま出イダちやるふ。

川野コト十郎コト いやさ、是コトに出過コトごしたは川野コト十郎コト与衛コトと

言コトふた若い者コト、品川コト表コトは見渡コトし申コトせば、三コトまいた

ら燈トウを吹コトき掛コトけく、おたちくる時はあつた。希ネガ

ひではないが奥コトの間に座談コト音がひびき渡る。是コトれ

何事コトぢや、たま出イダちやるふ。

水源コト田コト いやさ、是コトに出過コトごしたは水乃源コト左衛門コトと言コト

ふた若い者コト、吉屋ヨシヤは諸道コトに渡コトり、武芸ムゲを争コトひ、殊コト

更奢サラオコリをいなしと聞コトく。目外コトの項コト伐コトりて取りてち

まむけ出コトせ。

天津コト風コト いやさ、是コトに出過コトごしたは天津コト風コト、雲キョウのかよ

ひ地コトなんと言コトふた。若い者コトしてゑんまの経キョウに付コト

き、地獄チヨクのかましく、ふんくとふみふかし、

油コトけとうにとらしるぞ、くんら奥コトの間に座談コトの音コト

がひびき渡る。是コト何事コトぢや、たま出イダちやるふ。

吉屋 我が幼少ヨサナき行高の一子、親身オヤミに打ち離ハナさり、こ

こかしこの屋ヤアがまに、かまかへさあるに依ヨつて、老ロイ見るに世セに守サムラヒる士シの世セの中に、此クりと云シふ識シキ者シヤ、但シしにおたせ、五尺シヤにたらんやから、さの置シ所に、さてもふからとふから、やぐらとうとうし

たむんぢや、たま出イダち呉レい。

水源田 吉屋と云へるはおの子か。

吉屋 吉屋と申すは身共。

水源田 吉屋は諸道シヨドウにわたり武芸ブゲイを争アひ、殊更オコロ奢セをいなしと聞く。いつぞやの頃キタマを得てつまむけ出せ。

吉屋 いん、おの身ミが得てつまゝばつまみ殺クせ、殺クせ、どふでもいたせ。

水源田 してついものならば、身共ミトモが組クミには入イるまひが。

吉屋 いろ事コトならばしんと入イりたい。

水源田 しんと入イりたい。

(吉屋) おじゃくの下シタより言コトひだまり言コトひそめまし

て、ぐしゆくぐしゆく言コトひだまじどう御座ゴザる。

(全員) まじとう御座ゴザる。

(水源田) まじとう急イぎ。

吉屋 まあちとう御オン暇イダマ。

水源田 まあちとう御オン悪ワルさ。

吉屋 頼タノみましふ頼タノみましふ。

大名 誰タレぢや。

吉屋 吉屋で御座ゴザりましる。御見オンせ申マシ上げましる。

大名 吉屋と言へるはおの子か。

吉屋 吉屋と申すは身共。

大名 吉屋は何ナニの武芸ブゲイを嗜タシむや。

吉屋 吉屋稀キに興キりて法詩ホフシを作り、捕トラへたり搦カラめたり、

カタクタ 旁サカツキ、杯サカツキの武芸ブゲイを嗜タシみまして、斯カくと申マシ上げましる。

大名 扱チンて珍重チンチュウの儀ケイをいたしぞや、汝等イチニニン忝ハ人ニの事コト

なりば、料リウの軽重ケイチュウ申し付けをなりと、すりならぬ

儀ケイぢや、吉屋は今日ケイよりはれ世事ルサイをいたせ、当タけ

ん組クミの者共モノトモから津ツしまに、流罪ルサイとふた様相サマ心得コト得る。

吉屋 帰カイりやい、おの子汝等イチニニン二人ニの事コトなりば、料リウの

軽重ケイチュウを仰オホ付けをなりと、夫ソレならん事コトぢや。吉屋

は今日ケイより能ヨく世事ルサイをいたし、当タけん組クミの者共モノトモは、

から津しまに、流罪とふた様相心得る。

同人 吉屋は払へちぢや、身共もよくなるか、帰しう
ちやうは、島原のやしるつめに。

供 吉屋当賢組の者共、首尾能く払済まして、先ず
目出度ふ御座る。御供いたしましふ。

四 船 踊

一、きんやう、今度作りし御船をみれば、此の臺の
廻りはきんめかけ、舵は金でさんおち、たしかなる
あやとにしきを船がきおひて、此の白がねみがきの、
ともやぐら光輝やく。御船魂問ひ、此り絹織とんす
の幕をさせ、一步小判の作り込みより、結構祝ふた
御船かな。扱ても見事に川を出さ。

一、かの源の大奥（頼光）は、大江山なる鬼神退治を、
夫ついでに花見の心中。

（ヤアーチッテ、チッテチッテ、テッテヤス
リヤスリ）

一、かの山川のまぐれちやうは、一夜まぐれて是のか

ね貰ふてとは、酒屋で酒むりしんちよ。

一、十七八の振袖は、後る帯してしゃんしゃんとは、
人の心は、うかゝ心中。

五 大熊川

大熊川 罷り出でたるは大熊川源左衛門とは、某、

父誰人か不知に被討れて、何方無念に存ずる。父

菩提の為に千人斬を致そふと思ふ。先いそがふ、

此の当りでよかるふ。

山伏 一身長来満徳円満、くら合点がよかんせん。

大熊川 大熊川源左衛門とは、某父誰人か、不知に討

たれなんぼう無念に存ずる。父菩提のために千人

斬を致そふかと思ふ。

山伏 人を斬りて父菩提の為にならふかや、人を斬り

ては父菩提の為にならぬ。

大熊川 彼りは其方身は親の死だ。月日を知りたり。

山伏 おう知りた。

大熊川 山伏、山伏。

出伏 月は十三月、一日は十三日内、石橋山合戦の時、
ひこふの肥前に居た居た。

大熊川 彼^アりは此の上は長力^{チヨウリキ}も力^{チカラ}もいれば、社南無^{シャナム}

御師^{オンシ}、近々万事頼み上げましふ。

山伏 是れ^{カシク}皆々御覽候へ、只と追ふ畏^{カシク}き神のや

ふに聞くべし。大熊川源左衛門を、全く仏法^{マタ}の道
に引き入れる事で、先づ是れ御座る^{マタ}。

六 鎌倉三代記

龍野本は、「六、鎌倉三代記」として、六番目に鎌倉

三代記の見出し項目をつけ、「判官世上静謐に治り」か
ら「吉盛、落ち着いた^{カシク}」までのA部分と、「頼朝公、

如何に朝伊名われ此の山に」から「良小、過言で御座り

ました」までのB部分と、「実平、なんと与市兄弟の誓

約を」から「実平、過言^{カシク}」までのC部分の三つを、

一つにまとめてある。他の流布書写稿は、B部分を頼朝

公とし、A部分を鎌倉三代記とし、C部分を実平として、

三つに分けて見出しをつけている。

安政六年の富光による筆記文は、おそらくこの三つの
部分を一つにまとめて「鎌倉三代記」としてあったもの
と思われる。富光の筆記文は、三つの部分を三冊にして
それを綴じ合わせてあったのであろう。それを後世の人
は借りて書写しているうちに、「頼朝公」「実平」「鎌倉
三代記」と三つに分けて、番号まで付けたものとみられ
る。

この三つの部分は、『源平盛衰記』に発する風流狂言
から取材したものとみられるから、内容的には一つにま
とめるべきである。それで龍野本のごとく「鎌倉三代記」
の見出しを付けて、三つの部分を一つにまとめるのが妥
当である。いま山田は、龍野本を再改訂してB部分・C
部分・A部分の順に内容を変えることにする。

頼朝公 如何^{イカ}に朝伊名、われ此の山に住むとつたへ洩

れ聞き得る。打手^{ウチテ}が向かふと覺^{オボ}へたり。腹を押す

ぞかいしやくいたせ。

朝伊名 暫く此の朝伊名が御供^{オントモ}いたしましてからは、

千儀万儀共被思^{オボ}し召さる。

助国 頼朝公御座被成ナラれましるは何んと。

良小 頼朝公御座被成ナラれましるは、しよいの杉山と申しましる。

助国 是れより道何丁程も有らふよな。

良小 是れより道式丁程も御座りましる。

助国 聞いたより太フトそうにもあるふよな。

良小 左程は御座りませぬ。

助国 さあいそがふ。

良小 さあいそがましふ。

良小 はやといの杉山につきまして御座る。

梶原 如何イカに朝伊名。

朝伊名 身共は朝伊名では御座らん、此の山の菊売で

御座る。

助国 誰れなるおどけは合点が行かぬ。はやくふせぎなせ。

良小 どっこいこら。

朝伊名 弓はふせぎなるまい。

梶原 如何に朝伊名、汝ナムチが如何程の太刀タチとは有りながら、多勢タセイに無勢ムセイ叶ふや、まづしたりく。

朝伊名 儀に誤り入りまして御座りましる。見上げま

しるは御士オンサムラヒさふに見上げましるは、歌イッシュ一首いの

りましふか、御返歌オンカヘウタには歌ひて御座る。我ばか

し詠じ、花にあらはれて、おしもこじもよろしきもののふ。

梶原 くら助国殿、歌の御返歌く。

助国 身共は歌とやは、何も知らぬく。

梶原 しからばそりがし、歌の御返歌いたしましふ程

に、そなたは御存じのふりして、奥へ通りなられまし。

梶原 如何に朝伊名、汝が最前の歌の返歌をとらせる

ぞ、我ばかり詠じ、花にあらはれて、おしもこじもよろずもののふ。

朝伊名 其スり身が最前の続きたる歌で御座るかな。

梶原 汝が最前の歌にはよろずもののふと、自然の人の難儀に及ぶべし。斯く一命を助くると云へる心ありなる花は、此の間に列ナラハせく。

朝伊名 しからば梶原殿方、万事頼み上げましる。

梶原 委細キサイ心得ました。

助国 梶原が最前の歌に腹が入りたは利儀なし。ありなるおどけには合点が行かぬ。早く防ぎたをせ。

朝伊名 身共が手を取る者は何者か言へ。

助国 身共をしらぬ身共をしらぬものはなし。信藤入道助国何者かよき。

朝伊名 名乗る程の者では無きにや、しからば名乗りて聞きゆしが、朝伊名の三郎吉秀どっこいくら、おの身最前柴をふりけみんと言ふた柴には、頼朝公御座成されて、有り欲しき例ならよい事もあらふかや、おの身助くるやつではなきれ共、何んにおもひしらせん。

良小 身共の旦那を許さぬか、許さぬなら只今入り殺すぞ。

助国 言ひ過ぎて御座った。命の奉公御礼申せい。

良小 言ひ過ぎて御座りました。

実平 なんと与市兄弟の誓約をいたしましてから、随分励みでおじゃるが、なんと其方。

与市 よい誠に兄弟の誓約をいたしましてからは、骨

身の砕きるといふても、源氏の味方をいたし、随分戦ふて御座る。

実平 若年とは言ふて天晴、命が。

与市 左程は御座りましぬ。

実平 さあ急がう。

与市 さあ急ぎましふ。

良小 頼みましふ。

与市 誰ぢや。

良小 道中通る者で御座りましる。せり合いに病人一人御座りましる。見上げますれば御医者すうに見置きましる。御薬を一寸被下されましふならば、まことに有り難しと申し上げましる。

与市 申し上げましる道中通る者と見得まして、せり合いに病人一人御座りましる。見上げましゆれば御医者すうに見受けまして御座りましる。御薬をちと被下されましふならば、まことに有り難しと申し上げましる。

実平 くら奥へと申せ。

良小 くら奥へちと通り被成れまし。

実平 旅の病ヤマヒで息ふき苦勞ミヤクにありつるふよな、脈ミヤクをとりて薬シユをと進シユぜよふ。

助国 どっこいくりや、取りて入るか斯サカふみても入るかや土共サムラヒト。

良小 どっこいこらや。

実平 くら助国殿、身共ミトを御手組被成ナサシましるは、如何イカ様な次第ヨウで御座マシりましか。

助国 いかにも実平、今は平家の世となりば、源氏たる者は根を切り葉を枯らすとの、願するだに依りて、身共は今日役目に当り、今様イマヨウにしてあり。汝は降参ノゾミをいたし、御奉公オンホウコウが望ノゾミか、吃度キツトキハ究めて申せい。

実平 身共に御奉公とやは、いくら有難いな事で御座りましか。

与市 こら実平殿、左様サヨウでは御座るまいかな。

実平 土共サムラヒトの付き合いに、しがないな言葉を使ふまじ。

助国 如何に実平、身共は毒薬が入用ぢやる程に、悪道合はせておこせ。

実平 此の毒薬と申すは、上様ウヘサマより吃度御助キツトオンタシきに仰オフせられ、渡ワタされまして御座る。

助国 我オンタシに御助オンタシきとやは、いかに早く合はせておこせ。

実平 しからは合はせてとんじましふ程に、此の毒薬と申しましかは、四十九の骨までも、水に成るやうな毒薬で御座りましか。誠に中ナカのかなめ迄も、毛色ケイルが替カりましふ様ヨウな毒薬で御座りましか。こら道歩きで御覧ミぜ。どっこいくり、御奉公成る土サムラヒかな。しよいの次郎実平様、降参ノゾミをする人はあたたかなやつ、おの身助タシきゆる奴ヤツではなけれ共、なに思オモひしらせん。

良小 どっこいくりや、身共が旦那旦那を許さぬか、許さずんばさなだ与市、只今殺コロす。

実平 与市殺すとも是非ゼヒがない。おの身助タシきゆる奴ヤツではなけれども、後に思オモひ知らせん。

助国 言イひ過ぎで御座りた。命イノチの奉公ホウコウに御礼オンレイ申せ。

実平と良小 言イひ過ぎで御座りました。

実平 言イひ過ぎ言イひ過ぎ。

大名 判官、世上静謐に治り、身は一万に世を継

がせ、樂に過しぬと思ふ心は。

判官 若君様も降る血が留りまして、いかが御難を遊ばされまします。

大名 如何様、女の乳の留るとは、男の道を知りばこそ、乳の留るとは言へ。

小皿 其の儀はよく、小皿が御せんぎを被遊れませい、其の身内の夫れと申しましますも、大方知りまして御座る。

武士 私宅に熊のもぐりの山伏が参りて御座りまします。若君棟御寿命式百余歳と申しまします。

大名 其の山伏は何処に居た。

小皿 私宅に留め置きまして御座りまします。

大名 五郎、山伏を呼でい呉り。

五郎 畏りまして御座りまします。

五郎 山伏、御前へ参れ。

山伏 畏りました。

五郎 山伏是に伺向いたしまして御座りまします。

大名 一万の祈願したるは此の山伏か。

武士 成る程、此の山伏で御座りまします。

大名 寺を建立し一万の祈願所と頼もう。

武士 山伏御受けを申せい。

山伏 成る程、有難ふ御座りまします。

朝伊名 何んと山伏巧さとな、世の中に式百余歳までといふは、いかながいがい事構へで、うそつくな。

山伏 しからば何ぞ証拠を立て御目に懸けん。

朝伊名 誰を祈らさふには、あの五郎祈れ。

五郎 我を祈り祈れ。

山伏 あの五郎、首かけ。

朝伊名 山伏此の朝伊名といふは、昔親の代より片輪者で、くびがくたさり御座る。くさり首は其方に渡すぞ。

山伏 南無日天月天天照大神、熊野のには十二社、

権現。

五郎 あいた。

山伏 ころゑ、此の山伏の祈祷では、其の筈。

奥州女 頼もふ。

朝伊名 誰ぢや。

女 某ソレガシは奥州オウシュウの女ヲメで御座りましる。乳ウチのあるもの

あるならば、参れと判官殿より御触り廻りましるに依りて、是れまで罷り出まして御座る。

朝伊名 女良ヲナミヨふ来た、そこに侍れ、山伏ハベあの女ヲナミをいのれ。

山伏 謹上キンジャウサイヘン再遍ツツシは祥敬マラみて白す。高天タカマが原チクきちく神

とは、神カミひるみの水ミヅのおノのノごゴろロせるしめし、国クニと申すはしなの国クニの、八重ヤヘ釜カマの十釜トカマを以モちて、吹フきや払ハラふことのごとく、ふきて吹フくや払ハラへ払ハラへ。

女 其ヤウのノ様サマなる、むつかしき所トコロには身ミはいやで御座る。身ミはいやで御座る。

朝伊名 なんと世ヨをたタごゴん立タつツな、若君ワカミ様の御治ゴヂセイ世セいかんといふ事コト。

判官 さあ土ツチども、依りてもここはのがれ所トコロ。

吉盛 くらくら待マて待マて、ここは御前ミマエで御座る。しか相成アヒナさりましるな。此ココの度タビは何事ニニシも此ココの吉盛キキが、意見イオヒに付きやれ付きやれ。

判官 御意見ミイオヒと御座りば、早ハヤや是非セヒに及びませぬ。

朝伊名 なんと判官首ソナタは其方ソナタに渡ワす。

判官 成アツカる程ハカリ預アツカりた。

大名 朝伊名、中ナカをとふしゆる。

朝伊名 誰タりに中ナカをとふし成アツカりましるか。

大名 判官ハツコが智チに成アツカれ。

朝伊名 あアのやうなる悪人アクヒト、身ミが智チに成アツカるは、身ミはいやで御座る。

吉盛 朝伊名依りても、君キミの御意ミココロに依りて、智チに成アツカれ。

朝伊名 身ミを智チに取トルらラしシやるは、いかにむつかしきを御座る。

吉盛 むつかしきとは何んと。

朝伊名 先マづ文臺フミウチナ、長持ナガモチ、のりたんす、飯イヒ、米コメ、味噌ミソ、

塩シホ添ソへて吃度キツト祝儀イハヒ被ナサ成ナサれましる。

朝伊名 なんと松尾マツビ、昨日キノフ御前ミマエにて美浦ミウラ一統イツトウ絶ツツへ果ツて、鎌倉カマクラ中に御評判ミヘイバウがあり、今宵コヨヒ判官ハツコ朝伊名アサノ三郎サロウ、

智チに取り祝意イハヒをいたし、それに付き夜討ヨウチに向ムかカふ。早ハヤやばや用意ヨウイいたせ。

松尾 畏カシクマりました。

判官 何者ナニモノならば夜中ヨナカに押し寄せ狼籍ロウセキをいたし、灯トモシビ

燈アカりを消キやす。合点アツクがいカぬ、何者ナニモノぢや。

朝伊名 いやさあ、ここに出過デスコしたは松尾兄弟、昨日キノ

御前にて美浦一統絶へ果てて、鎌倉に御評判官オンヒョウハウクワン

有り。今宵判官朝伊名三郎聟に取り祝意をいたし、

それに付き夜討向かふ。早々太刀打タチウチの勝負。

判官 御士オンサムラヒども、寄りてもここはのがれぬ所。

吉盛 くらく待てく、あなたは道理こなたは尤モット

も、爰ココにひそむものでない。この後は何事も此の

吉盛が意見に、付きやれいく。

判官 御意見と御座りば、はや是非ゼヒに及びませぬ。

朝伊名 なんと判官、首は其方ソナタにわたすぞ。

判官 成る程預りた。

吉盛 落ち着いた落ち着いた。

七 牛若丸と弁慶

龍野本には十番目に収めてあるが、他の流布稿は十番

目より前に入れてある。鎌倉三代記と同様に、『源平盛

衰記』か『義経記』の狂言から取材したらしいから、鎌

倉三代記の次に収めるべきものであろう。安政六年に富

光が筆記したものは、「牛若丸と弁慶」を一冊にしてあつたものとみられる。それを後の人が書写して順番を取り違えたのであろう。「長刀」の見出しをつけた流布稿もある。龍野本と流布稿では、内容に若干の食い違いがある。ここには主に龍野本のものを取りあげる。

弁慶ビンケイ 只タダと人ヒトとに沈み入りたる落葉物ヲチバモノ。いかなるもの

とか、なほ思ふらん。齊藤のかたわなに、むさし

坊弁慶とな、わが事なり。いくさに参り、いくさ

の花打ちちらさふじるにて候サフロフ。帰カいれ。

牛若丸 只今人の問ふに沈み入りたるそばもの、いか

なるものとか思ふらん。当時鞍馬寺クラマに住み牛若丸

とはな、我がことなり。いくさに参り、いくさの

花打ちちらさふじるにて候サフロフ。

弁慶 あらいたはしの牛若丸はな、弁慶に合カひては叶

ふまじ。

牛若丸 あらいたはしの弁慶はな、牛若丸に合カひては

叶カふまじ。

牛若丸 うがたれんやんへ。

合同 来やりく、やかた続き、たんだ田へんと、思

ひ廻しマハば、当りのふしたんだへんと。

(背中合はせの合戦、戦ひつつ歌ふ)、弁慶は負けて防戦しつつ退却。

八 松尾姫と谷川源覚

龍野本は、谷川源覚から以下のところを松尾姫のところに収めてあるが、他の流布稿は別々に見出しをつけてある。内容的に両者は関連のある風流狂言であるから、一つにまとめるのがよいだろう。龍野本に従って一つにまとめ、見出しを「松尾姫と谷川源覚」とする。また、龍野本には欠けた内容があるので流布稿により補う。

姫 某は、シモノセキ下関に御座る吉屋と言ふ女郎を説きて居ります。なんと小三いかにもして、ウケテ請出して給ふと申しまして、コトコトコト細々文をかよはすなりと、身は女の事を其の儀なんと小三。

小三 身が隣りに坂田の源助と申しまして、ヒヨトシ日用取の

百姓が居ります。其りを呼んでやりましふ。

姫 よき所に気が付いた。早々呼んでこい。

小三 畏りました。

小三 源助殿く。

源助 なんとく。

小三 身が君より御頼み被成るをとある。早々ここへ

参れ。

源助 畏りました。

小三 源助殿ここへ伺候いたしました。

姫 源助殿谷川源覚世界の時、母はまま親の事成りば、あつらこつらといたす時分に、人かどないのか、問はりました下関に御座る吉屋といふ女郎は、身が為にままへ思ふと請け出して、ム給ふ細々文をかよはすなりと、ヨナミ身女の事をなりば、それに付き頼みまして御座る。

源助 其の儀は如何程に、オソココロ御心やすく被思召さる。オボシメ身共もたいてい上口で御座ります。

姫 上は小三、酒を出しや。

小三 畏りました。くんくくん。

源助 扱て扱て此の御酒、昔酒天童子と云ふ男は、加

賀に寄り酒越中にふり、酒是の儀に用心、酒
かがに聞き酒余多の名酒を平らげり。此の様な御
酒は、いまつたはつて御座る。酔ひました。

姫 源助殿居て休まっしゃれ。身共も酔ひました。

助五郎 なんと女房、夫の留守なりば、どこやら
とも知らぬ老人共と酒盛りをする。思ひば思ひば
腹が立つと、女房殺さにはならぬ。

姫 先またしやり、余りはやまらしやるな。下関に御
座る吉屋といふ女郎は、身がためにまま妹を、請
け出して給ふと申しまして、細々文をかよはずな
りと、身は女の事をなりば、それに付き只今源
助殿を頼み、酒を出してそれ故酔ひまして御座る。

助五郎 源助といふも、しあんに余った。

助五郎 成れども最早、夫の思ひ付いたに依りて、

女房殺さにはならぬ。

姫 余りはやまらしやるな、先またしやり。身共と
を結ばせやる其の時、二世迄と枕をならべ、心
替るまいとのことぢやから、其の儀なつとくさし

てやる。殺さば殺しやんり。

助五郎 扱ておの身口悪に言ふものか。あの女生かし
て置いては、中々世の中の妨げどもになるさ。

士ども傍らに引き出して、切り捨てていい。

武士 おいたはし御座れども、君の御意に依りて

是非に及びませぬ。早々念仏遊ばされまし。南
無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

谷川源覚 罷り出でたるは谷川源覚といふて、名を掲
げたる医者にてあり。助五郎智にとり、かかる所
に松尾の姫助五郎に殺され、いかにもしてかたき
討たんと思へども、身は此のごとく年は寄り、あ
の君どもは幼少、士どもは烈しきになり、さり
とは、無念な事であり。

大江の助 頼みまし。

谷川源覚 誰ぢや。

大江の助 某は山城の国大江の助で御座る。御見迎

申し上げまし。扱て愛は何事も御座りましぬか。

谷川源覚 ありは其の事よ、松尾の姫を助五郎に殺さ
れ、如何にもしてかたき討たんと思へども、身は

此のごとく年は寄り、あの者共はまた幼少、御身オン達は散り散りに成さるとな成さるとな。無念な事で御座る。

大江の助 某スリガシ付き添ひましたに依りては、ちつとも

御念オンオモヒカハ替り遊ばされまするな。やし〜と討ちて御目に掛けん。

源覚 万事頼みまする。

助五郎 頼みまし〜。

大江の助 誰ぢや。

助五郎 助五郎で御座る。御見迎申し上げまする。さ

て大江の助殿御久オンしくして御座った。

大江の助 其方ソナタは松尾の姫を討ちたにより、身の為に

は君のかたき。

助五郎 松尾の姫を身は討たぬ。

大江の助 其方ソナタの討ちた証拠であり。

助五郎 証拠とはなんと。

大江の助 坂田の源助証拠であり、すてみに相手にな

らふや。

助五郎 ここはのがれぬ所、ゑい〜。

大江の助 さてさて不念至極フネンシゴクで御座る。太刀タチウチ討をいたしまして打ち損じまして、源覚様にあの如く手を御負傷オンフシャウして御座る。さりとは〜無念ムネンな事であり。

武士 頼みまし〜。

大江の助 誰ぢや。

武士 余り御屋敷オンヤシキさわがしきに依りて、ここまで罷り

出まして御座る。さて爰ココは何事も御座りませぬか。

大江の助 ありは其の事よ。松尾の姫を助五郎クルに殺さ

り、助五郎只今爰ココモトへ罷り出まして御座る。太刀

討を致しまして源覚様もあの如く、手を御負傷し

て御座る。

武士 ありは其方ソナタの士サムラヒか。

大江の助 身を土とは合点が行かぬ。

武士 其方フシは武士よ。

大江の助 して身が相手になるふや。

武士 おお、さあ相手になるふ。

山伏 やいすり其所スヶは待て待て、最前より承ウケタマハりま

すれば、よしなき所にて太刀討を致しまするな。

此の度は何事も此の吉盛が意見に付き、三人が三方に分かり、思ふ方を討ちとめ本望とげん。先づここを立てここを立て。

武士 頼みます頼みます。

源覚 誰ぢや。

武士 某は、近国西国方々を尋ね廻りまして御座り

とも、思ふ敵に行き合ひませぬ。

源覚 大儀で御座った。内にはいり。

吉盛 頼みます頼みます。

源覚 誰ぢや。

吉盛 某は、東国北国尋ね廻りて御座りども、思ふ

敵に行き合ひませぬ。

源覚 さて大儀で御座る。内にはいり。

大江の助 頼みます頼みます。

源覚 誰ぢや。

大江の助 某は九州九か国方々尋ね廻りまして御座り

ども、思ふ敵に行き合ひませぬ。さて昨日の昼

の刻、子供の話を承りますれば、源覚様御屋敷に

助五郎を夜討に入る役、受け給はりました御座る。

大門小門を取りしめ、一番門を突きしやしやりましい。

源覚 さて大儀で御座った。内に入り良小冷飯でも進

じ、無しの香の物でも出しやい兵太郎。

兵太郎 はい。

源覚 同じ兄弟よ、都合門番を致せ。

兵太郎 畏りました。やいくら兄をさま兄をさま。

兄 何んと何んと。

兵太郎 同じ兄弟よ、つごふ門番を仰せ付けられました。

一寸相談が御座る。

兄 相談とは何んと。

兵太郎 此の屋敷に助五郎をみだりに入れ、源覚様を

討ち止めあるなるふ、助五郎よりただに預り、越

前の国しば山に引きくもり、世を楽に過ぎんと思

ふ心はるふ。

武士 頼みます頼みます。門番誰ぢや。

武士 最前より承りますれば、此の御屋敷に助五郎を

みだりに入り、源覚様を討ち止め、助五郎よりた

だに預り、越前の国しば山に引きくもり、世を楽

に過ぎんと思ふと言ふたなあ。

門番 ありは左様では御座りませぬ。此方コナタは聞き違ひ、

此の屋敷に助五郎討ち捨てあるなら、源覚様より
ただに預け、越前の国しば山に引きくむり、世を
楽に過ぎんと思ふ此の理を申した。

武士 ありは左様で御座ったか、此方コナタは聞き違ひすそ
う致した。許しやつしやりました、そふそふ。

助五郎 頼みます頼みます。

源覚 誰ぢや。

助五郎 助五郎で御座る。夜晴らしに罷り出まして御
座る。さて此の処は何事も御座りましぬか。

源覚 ありは其方ソナタは松尾の姫を討ちたに依り仇なりど
も、御身の事で大勢を引き越して御座る。其方は
小勢身は大勢に成りば、早く内に歸りて用心致せ。

助五郎 士サムラヒたる者の多勢に無勢に入る者か、此処ココで
勝負を致しましゆる。

源覚 本望ホンモウを遂げん、本望を遂げん。

助五郎 本望を遂げたい、本望を遂げたい。

九 六十ぶし

一、目出度メデタのな〜、うれしめでたの、ないきり〜。
ともきんけながら、咲いたまことにな、枝もさかへ
る葉もしげる。かれやれや。

一、石垣のな〜、ぐしくの石垣ない、から〜さん
きな、石ぢやもの金カネぢやもの、ならばさとせ。

一、かくしかなから、しかなやぶめから、しがな
りけり、しがなけりけり、ともさんきな、金は持
たじに買を〜と、いふあいだも茂る葉も茂る。は
ればれさらば、東西南北ちぢまみたんだ。

一、天地堂の仏ボトなら、ちた合ふて、まかりゆる筈は
ないけりないけり、ともさんきな、ちた合ふてまか
りゆるから、ちたが又仏ぢやからよん。いよさ〜。

一、ちたが又仏なら、火に合ふて、焼きゆる筈はない
けりないけり、ともさんきな、火に合ふて、焼きゆ
る焼きゆるから、火が又仏ぢやからよん。いよさ
〜。

一、火が又仏なら、水合ふて、消ゆる筈はないけりな

いけり、ともさんきな、水合ふて消ゆるから、水が又仏ぢや。いよさく。

一、水が又仏なら、魚合ふて、飲まりゆる筈はないけりないけり、ともさんきな、魚合ふて飲まりゆるから、魚が又仏ぢや。いよさく。

一、魚が又仏なら、人合ふて、噛まりゆる筈はないけりないけり、ともさんきな、人合ふて噛まりゆるから、人が又仏ぢや。いよさく。

一、人が又仏なら、仏の前にて、拜みゆる筈はないけりないけり、ともさんきな、仏の前にて拜みゆるから、仏こそ仏ぢや。いよさく。

十 天笠歌

今宵は行きてあふ、賤の勤の世界に忍びやりりも、露踏まば萩をも諸々のなり事ぞ。てが文にていひに、人歌ひばおとづりせん事を、とても相恋らん。わぬ恋ひゆる子は、実に請りたぎつ。行の思ひ思ひは、思はされとうる夜毎に替る浮枕。あとらへながらの勤とて、朝

な夕なのきばり坂。柳時のちやのかれきを持ちて、諸々のあくまを封じ、あらかたやりかたやおもしろや。忍ぶや心出た夜もある。かた月やあくま降りくる世の習ひ。

一、きんやう、ていちこのなあ雲のあいより、きんやう十三姫が米蒔くとなあ。けんやうけんやう。米蒔かば、なあただに蒔くな。きんやう見るうち、溶きてとまごふな。けんやうけんやう、ちんていんてい、到底集ふてい集ふ。

一、きんやうぐしくにな、赤佐泊にもきんやう、見る船が着くとな。けんやう米積んで、いで集ふてい集ふ。けんやう集ふてい集ふ。集ふてい集ふ。

一、きんやう、沖繩綿積んだ積んだ。山路を歩きばなど心とては、ちどん世はもめくは、あちらに連れがあるふ。やりつれ、かのあるてんそとしれとては、集ふかんで集ふ。

一、与論てゆる島やよ、小さき有しが、けんやるやるや、大鍋ぬ底中に、穀ぬたまり。ちゃんや、あさよひしちよ、心しよいくの心しよいくの、広田

のあみ笠持ち上げてい、借すやく 隠しおかし目が、
との川御座る御座る。

十一 高武蔵 タカブソウ

これは龍野本にはない。他の流布稿によって追加して
おく。沖縄狂言の移入したものらしい。

高武蔵 わぬどう、首里から下りたる高武蔵どうええ
しが、今日や天気も晴りゆい。作場見い廻りし来
んばならぬさあ。あめ田見りばん、ありとう其ぬ
此ぬ田、見りばん荒りとうん。わったあ山しるや、
一つええゆたんせえさあ、山しるよう、山しるよ
う。

山しる 今日一昨日、首里から高武蔵ぬ、下りたん
ちぬ話ええしが、あめじゆとうぬ、やな顔どう
ええさあ。

高武蔵 あめ田見りばん、ありとう其ぬ此ぬ田見りば
ん、ありとうぬ、一つええゆたん、しんさあ、き

ばりよう山しるよう。

番外（一番組と二番組と合同）

大旗を先頭にして、次に太鼓、次に一番組の金だら
いを竹の小枝で打って太鼓の音に合わせ、三味線の音がこ
れに和し、次に二番組の全員が扇を持ち歌い踊る。「雨
賜ボオリ賜ボオリ」、「イミ賜ボオリ賜ボオリ」、「島ガ富
ドウ世ガ富」を各々繰り返して三回歌って、二番組の歌
と舞踊に移る。

雨賜ぼうり 賜ぼうり いみ賜ぼうり 賜ぼうり
島ガ富どう 世ガ富

豊年踊二番組

昭和十一年五月龍野興澄印刷、昭和四十六年九月山田実
改訂、昭和五十七年五月山田実再改訂。

一番 一度いふて（扇踊）

一度言ふてにて、二度言ふてにて去り、三度言ふてにて、ならざりば置き去り。鉄で延べたる身でもなし。其方百迄我は九十九迄、心替るな何時迄も。七里八里の山道越えて、来るは誰が故か様が故、とるへとるへの山道起えて、来るは様が故。

二番 此の扇（扇踊）

此ぬ庭ぬ内に、参りて見りばやな、見事八重ぬ上に、黄金花咲く。又此ぬ庭ぬ、いぬへの住吉降りてい見りば、去年より今年、世間なほよし。

三番 今日のぷくらしや（手踊）

今日ぬ福らしや、直り座成ていどうええる。蓄み居る花ぬ露ち有たる如。此ぬ庭ぬ中に 桃ぬ木植いてい、此りが花咲かば、世が富真米。

四番 君様（扇踊）

君様と君様と御座る。君様ぞよ、響きある笛と尺八と兼ね添へて、鳥よりも鐘よりも、酉の朝日の廻るまでも、はづしかねたる打ち枕。はづしうけたる腕枕。君様の君様の、枕並べてまる寝して、うきくりのことば語り尽さん。

（夜深く過ぎていかなる場所を通るとも、この歌を歌つて通れば魔除けになると言い伝えられている）

五番 坂元（手踊）

坂元ぬ位牌や、だんじゅ響まりゆる。ゆひちゆらが一本、蒲葵ぬ三本。ちゃあじのやちやるにて、貫かぬ蔵に打ちばきてい、すり似たと、やがてい真首類な。（夜ふけにこの歌を歌えば、魔物にあうと伝えられている）

六番 あひま恋し（扇踊）

あひま恋しに出て見りば、あひまがなしに口説しよ。我がくどきみせる夜は、昨夜見た夢はほのぼのと、君と

寝た夜の 暁は、山をだんしがすくまでも、山を隔みて雲ばかり。

七番 むりんくわ（手踊）

むりん桑ぬ花や、むぬ言はぬばかり。露に打ち向かてい、笑ふてい咲ちゆり。与論てゆる島や、小さくさや有しが、鍋ぬ底中に、穀ぬたまり。

八番 盛りの松（扇踊）

盛りぬ松、一ぬ門ぬ姫とう、逢ふてい賜ほうり。みだやくし藍に染みてい、夢に見れば、つれなき君の面影。

九番 踏み乗らん（手踊）

踏み乗らん八重嶽八重重ね、十重ねとうどう虫やあしさみ。桜花里ぬ子、梅ぬ花女童、見てい見い欲しやばかり。袖振らば里ぬ子、ちんちやらどう香しゆるか、どうくうみなびが、くどうきぬ煙草、又むくどうきね纏り煙草。

十番 十五夜の月（扇踊）

十五夜ぬ月待、冴ひて淋しさあり。君待つ其の夜、更に寝らりぬ。思ひばどう思ひばどう夜明きてい、夜は戻らりぬ。しどうるむどうるぬ、杉ぬ山路。

十一番 しゃわぶん（手踊）

しゃわぶんが、踊の初まる時は、伯父も出て見る。母連りた、しゃわぶんまんがちる。しゃわぶんが、しき船造てい、形は善けれども、舳巻ぬしゃわぶんが、祖母様焼餅作た。昨夜九ち今朝七ち、船は出しゆらば、夜明きてい出しようり、向ぬ湊に瀬が御座る。踊り踊らば三十までい踊り、三十越したらば子が踊ゆる。

十二番 あぐね長者（扇踊）

あぐね長者殿、呼びに召し居れば、浮世ぬ物語またむ物語。みやじょう、きくじょう、うち合ふてい思ひきり。しめ染みてい離さりぬ。しめ染みてい離さりぬ。

十三番 喜界の五平（手踊）

喜界ぬ五平に、響まりゆる御屋敷や、長部屋にて見
りば、阿旦前垣、聞きよき真竹ぬ、岸ぬ浦ぬ渡り川、
泊てい咲ちしちゆてい、御祝しらん。喜界ぬ湾泊り、
行き立ち欲しゃ有しが、何時ん来ちゆる、暇ぬちぢ家
ぬ、有いくとう有いくとう。

十四番 空の七夕（扇踊）

空の七夕おとしふ御座る。川を距ていてい恋ぬ道。
空ぬ鴈何処に行く。日本ぬ良か人に嫁入り。

十五番 たんでい浜千鳥（手踊）

頼でい浜千鳥、朝間夕間鳴くな、鳴きば面影ぬ、増
さてい立ちゆい。千年経る松ぬ、緑葉ぬ下に、亀が
音しゆりば、鶴が思ひまわる。御行き合ひ、拝まじゆ
ていしゆりば、夢やんちゆん見やらじ、神ぬ引き合ひに、
御行き合ひ、拝みやあびゆてい。

十六番 歌むりん（扇踊）

歌むりんが、月ぬ花に物いらぬ。あぬ彼様とう連りてい
行きば、二千里は十日に通し、假令あちまぬ果ていまでい
む、文も返事も使はいらぬ。ああ千月ぬある、あぬ彼様
とう列でい行きば、二千里は十日に通し、假令あちまぬ
果ていまでいむ。

十七番 沖泊り（手踊）

沖泊り真砂や、太陽どう紛らしゆる。御月紛らしゆる、
我玉黄金。石なごうぬ石ぬ、大石成るまでいむ、御蔭
治みしより、我が王がなし。

十八番 思ひ定みて（扇踊）

思ひ走みてい打ち出しより、思ひ出しより我が姿。思
ひ走みていくる時も、元の一人は残るもの。旅は世の後
の子が御座る。明日船出ぬ梶枕、さらばさらばの暇
乞ひ。